

特別対談 ● 今西祐一郎 × 横田カーター啓子

国文学研究の国際展開 著作権・データ・図書館

世界レベルでの資料保存と研究の発展のために、いかにして海外に国文学を発信し、国際的な協力体制を築いていくか。

国文学資料のデータベース化と国際協力研究を推進してきた国文学研究資料館館長・今西祐一郎と、長年にわたって日本研究資料のグローバルな普及に取り組んできたミシガン大学日本学研究所書・横田カーター啓子。

世界に向かう視線と、世界からの視線が交錯する。



今西祐一郎

国文学研究資料館館長。専門は日本古典文学。著書に「通俗伊勢物語」（平凡社東洋文庫、一九九一年）、「源氏物語覚書」（岩波書店、一九九八年）、「蜻蛉日記覚書」（岩波書店、二〇〇七年）などがある。

国文研の国際協力研究

横田 まず国文学研究資料館（以下、国文研）の国際協力研究の取り組みとして、パチカンの話は皆さん興味があるんじゃないでしょうか。

今西 私たちがやっているのは、マレガ・プロジェクトという、一万点くらいの豊後のキリシタン関係文書群の調査・研究と保存修復そしてデジタル化です。

横田 マリオ・マレガ神父が持ち帰った江戸時代のキリシタン関係の文書を、歴史学と古文書研究の方が、史料研究をしながら保存や修復もされていて、さらにワークショップもされているわけですね。

今西 そうです、ワークショップのときは、修復に使う和紙も持つて行つて。
横田 パチカンのほかには、どんな国際活動がありますか。

今西 これまでに、プロジェクトというほどの規模ではありませんが、イタリアのキヨソーネ美術館やカリフォルニア大学バークレー校東アジア図書館の三井文庫、フランスではイナルコの図書館、ローマのサレジオ大学などに所蔵される日本古典籍の調査ですね。そういうところで、目録作成のお手伝いをしてきました。

横田 その目録を作ったあとに、さらに研究的な段階に進むわけですか？

今西 当初は目録作成で終わっていましたが、研究にも亘る事例としては、『ハーバード燕京図書館の日本古典籍』（八木書店、二〇〇八年）があります。これは、かつて国文研の副館長岡野彦先生を中心とする『ハーバード燕京図書館和書目録』の後を継いで後の副館長鈴木淳さんとハーバード図書館の司書マクヴェイ山田久仁子氏の

共編で、目録作成から一歩踏み込んだ研究になっています。また、同じ鈴木さんによるシーボルトの蔵書研究もあります。ライデン大学とライデン博物館に所蔵されるシーボルトの蔵書について目録を作り、論考も備えた『シーボルト日本書籍コレクション 現存書目録と研究』（勉誠出版、二〇一四年）という成果にまとめられました。これは（マレガプロジェクトもそうなのですが）人間文化研究機構という私たち人文系大学共同利用機関の上部組織が行う在外資料調査の一環として実現した成果です。

横田 鈴木淳先生は、私がワシントン大学にいた時に来ていただきました。スペシャルコレクションを見ていただき、保存について助言いただきました。

横田カーター啓子

ミシガン大学大学院日本学研究所書・日本研究センター所員。北米日本研究資料調整協議会前会長。津田塾大学国際関係学科卒業。西ワシントン大学フェアヘイズカレッジで女性学を専攻。スタンフォード大学教育大学院国際開発教育修士号取得。ミシガン大学情報大学院図書館情報学修士号を取得し情報スペシャリストになる。ミシガン大学での図書館サービスの向上を中心に、北米全体の大学図書館における日本研究を促進する学術基盤充実に取り組んでいる。

今西 彼はイエール大学でも貴重な日本古典籍の調査を行っています。その成果は、同じく勉誠出版から出された『イエール大学所蔵 日本関連資料研究と目録』（東京大学史料編纂所編、二〇一六年）となっています。

横田 イエールほどの大学になると、そこで古典研究ができるほどの資料がありますね。

今西 そうですね。ただ、それまでの仕事は国文学研究資料館の仕事というよりは、その方面のエキスパート鈴木さんの個人的業績という面が大きい。国文研が組織を挙げて取り組んだ事例としては、アイルランドのチェスター・ビートイ・ライブラリーと共同で行った調査と共同研究があります。その成果は『チェスター・ビー

ティー・ライブラリー絵巻絵本解題目録 図録篇・解題篇』（国文学研究資料館・The Chester Beatty Library 共編、勉誠出版、二〇〇二年）という大冊にまとめられました。現在は、カリフォルニア大学バークレー校東アジア図書館と共同で、同館所蔵の三井文庫の善本解題などに取り組んでいます。

学術書のための法改正を

横田 いま、日本でも博士論文をデジタル化して、オンラインで公開されるようになりました。でも研究者や大学院生の間では、ウェブ公開してしまうたら出版に不利になってしまうという声もあります。

今西 文系では、博士論文という研究成果をデジタル化よりは書物の形にし



たいという気持ち強いのでしょうか。すでにウェブ公開されているものを出版するのは、出版社も採算上難色を示すでしょうね。

横田 でも、博士論文をそのまま本としては出版できないのでは。一冊の本にするためには出版社によるプロの編集の仕事を通して、文章が直され、構成が整えられるので、論文とは別の「書物」になりますね。

今西 論文審査はパスしても、その際、審査員からいろいろな指摘がなされるでしょう。本にするのならそれらを踏まえて、またタイトルなども編集者の要望もあるでしょうから、そのままというわけには必ずしもいかないでしょう。同じ博士論文でも、理系の場合は論文のスタイルや題名などより、示されたデータが大事でしょうから、事情は全く違ってきますね。それに理系の場合は、一刻も早い成果公開が求められます。

横田 ある大手の編集者は、論文のデータベースを検索し書籍化できる研究を探そうです。その場合もすぐに読めるフルテキスト論文が有利です。

今西 データベースになっていると、そういうメリットもあるんですね。しかし人文系の場合は、博士論文はもとより雑誌論文などでも、材料・資料と

して図書館あるいは個人蔵の写真を使用することが多い。それらは雑誌掲載の許可は取っているのだけれども、ウェブ公開の許可は改めて申請するか、あるいは申請しても許可されない場合もあるでしょう。そういうわけでウェブ公開は見送らざるを得ない。学術雑誌のデジタル化の遅れもそれが原因です。現在、大学では機関リポジトリで、研究機関の刊行物のデジタル化が推奨されていますが、したくてもできないケースが少なくないのです。現に、国文研でも『紀要』や『調査研究報告』のデジタル化は遅れています。著作権法の改正をして、非営利の学術資料デジタル化に関しては、規制をなくしてほしいものです。

横田 よくぞ言ってくれました(笑)。まったくそのとおりです。

今西 学術書・学術論文の場合は、過去にさかのぼって全部デジタル化してウェブ公開しても法に触れない、というように改定してもらわないと。

横田 本当に、それはしていたかったですね。

画像の『国書総目録』化 ——国文研の夢

今西 法律改正ももちろん関心事ですが、国文研はいまクリエイティブ・

コモンズ (Creative Commons) が策定した「CC BY」などのクリエイティブ・コモンズ・ライセンス (Creative Commons License) を用いて、著作権問題を解消したうえでオープンデータに取り組んでいます。国文研は持っている本が非常に少ないから微力ではありますがすけれども。

横田 古典籍のオープンデータ化にオープンサイエンス政策とライセンスの世界基準を導入された。

今西 所蔵表示をしたうえで、自由にお使いくださいということですね。商業出版に使うことも含めて。しかも、従来の学術書の場合はあり得ないけど、「CC BY-ND」という表示で改変を禁止しないかぎり、変形・加工してもいい。そういうことに著作権者の許可が要らないんです。

横田 古典籍には著作権はないですが、資料の利用に国文研の許可は不要ということですから、かなり研究が変わってきますね。画像が鮮明で利活用の幅のあるIIRF対応されたのも画像オープンデータ化の成果だと研究者間で評価されています。

今西 ただ、国文研が持っているものしかないの、まだ七〇〇点ぐらいです。

横田 日本古典籍データセットは七〇〇

点ですが、国文研の和古書画像全体では一万九〇〇〇点以上オープンデータ化されていて感動です。これからもさらに進めていかれますか。

今西 進めたいのですが、完全なオープンデータ化は、今のところ国文研が所蔵しているものしかできません。いろいろな機関や大学が対応してくださればありがたいのですが。

横田 日本には宝のような資料が散在し埋もれています。ひとつのユニオンカタログができるだけでも、あちこち探さなくても貴重な資料が発見できます。

今西 そうですね。文字情報のユニオンカタログである『国書総目録』に対応する、画像データのユニオンカタログが必要であり、また実現可能な時代になっていきます。ところが、現在いろいろな図書館で行われているデジタル画像公開は、それぞれの館が所蔵している典籍に限られています。

横田 そうですね。

今西 そうなると、個々の機関にどんなにいい本があっても画像が公開されても、情報が網羅されていけません。古典籍の場合は、版本もあれば写本もある。ところが版本しか持っていないから、当然ながら版本の画像しか出せない。写本しか持っていなかったら、写本しか

出ない。また版本の場合は何種類も版種がありますが、それが多様な情報として入ってこない、研究のスタートにならないのです。

横田 そのとおりですね。

今西 個々の画像を『国書総目録』の情報に接続することができれば、すべてに画像がなくても、その本が現在どのくらい残っているのか、版本がどこにどれくらいあるか、写本はどうだといった書物の全体像を俯瞰できるわけです。そして、その中でいくつかの公開可能な画像データをアップしていく。まだ画像データがないものがこんなにたくさんありますよ、ということを知らせるのも大切です。現時点のデジタル化の大部分は、こういう本がありま

すから、ご覧くださいというだけで、他の図書館にもある本なのか、そこにしかない孤本なのか、といったことがわからない。そういう意味では、私たちが目指している『国書総目録』と連動させる画像データベースというものの必要性は、大きいと思います。

横田 しかも『国書総目録』の書誌情報だけではわからないところは、画像が重要です。

今西 そうです。『国書総目録』には、最小限の情報しかない（もちろん、それだけでも随分ありがたいのですが）、

ところが研究となると、そこから先の情報がいろいろ必要です。そういったものも、画像データがあればかなりカバーできるということですね。

横田 いろいろな典籍の違う画像があれば、ひとつのところにまとめていくということですね。そうなる素晴らしいですね。

今西 『国書総目録』以前には、国立国会図書館——昔は帝国図書館ですね

——それから内閣文庫、あるいは民間では静嘉堂文庫、大東急記念文庫などなどが、それぞれ立派な目録を作っていたわけです。しかし、利用する側としては、それら多くの目録をひとつひとつ見ていかなければいけない。それらが『国書総目録』に集約されることによつて、一挙に本の所在がわかるようになった。これは画期的でした。それから何十年か経つて、デジタル画像という便利なものが出現し、いろいろなサイトで公開されています。それだけでも十分ありがたいはずなのですが、現実としては複数のサイトを次々に見ていかなければいけない。ということは、これはデジタル版における『国書総目録』以前といえるのではないのでしょうか。

横田 はい、そうですね（笑）。

今西 だから、画像データの『国書

総目録』化を図らなければいけない。『国書総目録』が個別の目録を統合して一覧できるようにしたように、いろいろなところに散らばっているそれぞれのデジタル画像目録を、一個所で集中的に閲覧できるようにしないと、いけない。それをしないと、これからどんどん増え続ける個別画像データベースの海にさまようことになります。

情報処理の ワークシヨップを

横田 「日本古典籍総合目録データベース」に大型プロジェクトでさらに

国内・海外に点在する古典籍画像もここにまとめられていくと最高です。

今西 そうです。海外資料は、画像については立命館アトリサーチセンターの赤間亮さんが、かなりデータを取ってきている。そことの連携を模索しているところです。それから目下共同研究を行っているカリフォルニア大学バークレー校東アジア図書館の三井文庫蔵本の紙焼き写真が何百点かあるのです。それももうすぐ公開できるはず

横田 マイクロフィルムの画像化公開ですね。

今西 バークレー校の場合は、国文研創設期の海外調査でマイクロフィルム

撮影をしていたのです。それをデジタルにコンバートして、とにかく公開しましょう、ということになりました。海外の図書館でも、すでに日本古典籍のデジタル化をやっていると、いろいろありますね。その画像さえいただければ、国文研のデータベースに載せて、『国書総目録』の書誌データと合わせて発信できるのですが。

横田 アメリカの司書たちはユーザーの視点から古典籍データベースの仕様について要望書を出し、いろんな面で大型プロジェクト推進に協力したいと願っています。

今西 私たちが撮影のためにアメリカやヨーロッパに行くとなると、これは経費の問題で無理ですが、そこで撮影したものを提供していただく、あるいはリンクを貼るという方法で、こちらで書誌をつけるということではできません。

横田 ミシガン大学独自にデジタル化した画像とOgionプロジェクトでデジタル化した画像の両方がハテイトラスト (HathiTrust) に保存・共有されています。その画像と書誌データを古典籍データベース内の同一典籍にリンクさせたいです。

今西 それはありがたいことですが、Googleは営利事業なので、難しいの

ではないですか？

横田 ハテイトラストはリンク連携するのは問題なく、既にCEJ内での書誌情報とハテイトラスト内の同一書籍で著作権が失効している資料画像がリンクされました。例えばミシガン大学所蔵タイトルのリストをリンク先のURLと一緒にお渡しできれば……。それでも、オリジナルの本と照合される必要はあります。

今西 従来はそうしてきました。しかし、画像をみればある程度まで同定できるのではないのでしょうか。調査カードのような文字の情報だけでは、同じものかどうかかわからないわけですが、画像を見れば、基本的にはわかりますから。

横田 そうですね。たとえば画像点検も国際協力プロジェクトにして、国文研の方にしていただくことは無理でしょうか。

今西 点数にもよりますが、例えば五〇〇〇点、一万点となると、それを調査点検するための人を雇う必要がある。ただ、そういう同定作業のワークシヨップみたいなものを行うことはできると思っています。

横田 例えば古典文学を専攻している大学院生に、古典籍についてのワークシヨップをする。それはいいアイデア

ですね。それは研究にもすごく役立つことだと思います。

今西 国文研にはかなり細かな調査カードを取るシステムがあつて、研究者の協力を得てこれまで何十万枚という書誌カードを蓄積してきたのですが、画像を収集できるようにすると、調査カードというものの意味も変わってきますね。

横田 ああ、なるほど。

今西 内題、外題、奥付がどうかとか、何丁あるとか、表紙は何模様だとか。それを調査する人だけは現物を見て、あとの人は現物を見られないから、調査カードで情報を得ようとするわけです。そこは人間のやることだから間違いもある。それが、画像で全部公開できるようになつたら、その必要性はだいぶ変わってきます。デジタルの時代には、カードはごく簡単なものになるのではないのでしょうか。

横田 時代に即した考え方でプロジェクトも変わっていくのは当然ですね。うれしい指摘です。

ハテイトラストの試み

今西 アメリカの図書館では所蔵資料の公開などで、大学同士の横の連携などはあります。

横田 コレクション構築を共同でして

いるグループがあります。資料のデジタル保存と公開による共有はハテイトラストですね。

今西 ハテイトラストは、どういう仕組みなんでしょうか？

横田 簡単にいえば、デジタル化による資料保存とリポジトリですが、アメリカでは基本的に政府刊行物と出版後九十年経った資料は著作権が失効しているもので、そういった古い資料を中心に公開・共有しています。まずはGoogleがデジタル化したものがひとつの大きな柱です。それとは別に、各大学がデジタル化保存している資料があります。ハテイトラストというのは、参加校の大学が協同運営する大きなサーバーの中に、その両方のデジタルデータを入れて共有利用しましょうという仕組みです。出版後九十年経った資料は、アメリカ国内のパブリックドメインで自由に閲覧できます。出版後一四〇年経った資料はワールドワイドパブリックドメインで公開され、日本からでも見ることが出来ます。日本では、慶應大学はGoogleによるデジタル化資料をハテイトラストに加えてくださいました。

今西 日本では慶應大学だけです。

横田 はい。慶應からの資料のおかげで、いろいろな貴重な資料を見ることが

できて助かっています。

今西 その場合は、書誌はどうなっていますか。

横田 慶應が作成した簡単な書誌がついています。ただ、ローマ字はついていないくて、日本語のものだけです。いまは九万三〇〇〇点近く入っています。

今西 古典籍ですか？

横田 はい、ほとんどがそうです。

日米の図書館・ライブラリアンの違い

横田 今西先生には、司書向けにアメリカでくずし字のワークシヨップを三年間して下さつて、本当にありがたかったです。

今西 アメリカは三年ですけど、ヨーロッパでは五年やりました。私の任期はもうすぐ終わりますが、二月始めにE A J R S (日本資料専門家欧州協会、European Association of Japanese Resource Specialists) との共催で英国ノリッジのセインズベリー日本芸術研究所で行います。

横田 そうなんですか。

今西 図書館司書の組織であるE A J R Sとの共催ですから、学生もいないことはないけれど、基本的にはライブラリアン、キュレーター相手で中級レベル向けです。

横田 先生はヨーロッパやアメリカの図書館を訪問され、海外のライブラリアンと交流が深いですが、日本との比較で、何か思われるところはありますか？

今西 まず何といつても、欧米と日本の図書館司書では、身分が全然違うということです。欧米のライブラリアンは、大学のなかでプロフェッサーと同格の地位です。しかし、日本のライブラリアンは、こういうことを言うとかちられますが、大学図書館の司書の場合、教員の僕しもという性格が強い。そこが違いますね。もうひとつは、これまでの日本の司書は学部卒業が主流だと思えますが、欧米の場合、大学院で図書館学を学び、PhDを持っている人も少なくないようですね。

横田 そうですね。日本研究司書も博士号取得者が増えてきました。日本の大学図書館に対して要望などはありますか？

今西 いま、小規模な大学では、正規職員としての司書を雇う余裕がなくて、TRC（図書館流通センター）やCCC（カルチュア・コンビニエンス・クラブ）を指定管理者にして外部委託するところが増えていて聞いています。本の専門家がいない図書館ということになると、それはゆゆしき問題ですね。

横田 古典籍などの研究をされていると、特にそうお感じになるのでしょうか。ね。

今西 ただ、最近聞いた話だと、そのような図書館職員派遣業にも司書資格を持った人が就職しているようで、そうなるかと多少話は違っていますね。しかし、変体仮名をすらすら読める司書は少ないと思います。大学の図書館でもそうで。展示などをするのでも、企画はほとんど全面的に教員に頼りきりです。それに対しアメリカのライブラリアンは選書権限を持ち、当然古典籍に対する知識もある、そしてさらに知識を高めようという意欲もある。

横田 たしかに選書権限はありますね。

今西 あちらで話を聞いて、すごい権限を持っているという印象を強く受けました。コロンビア大学だったかプリンストン大学だったか、日本担当司書の年間の執行予算額が四〇五〇〇万円あるとか。

横田 ミシガンもそれくらいありますね。

今西 教授が「これ、買って」と頼みに来るらしいですね。日本では考えられない（笑）。それとアメリカの研究者は、これはあまり大きな声では言えないかもしれないけれど、日本の研究者ほど自分で本を買わないんじゃないですか。

横田 私もそれは感じますね。

今西 それだけ図書館が充実しているということでもあるでしょうが。

横田 図書館も充実しますが、でも「辞書を買ってくれ」と言われたりして。大丈夫かなこんなので、と思ったりますこともあります（笑）。本に対する考え方が違うのでしょうね。

今西 日本の研究者はわりと本を持っている、少なくとも私たちの世代までは、『日本古典文学大系』のたぐいははじめとして、『私家集大成』、『国歌大観』、『群書類従』正統、自分の専門に関わる時代の『大日本史料』、『古事類苑』、『日本国語大辞典』、『国史大辞典』、天理図書館や冷泉家の影印叢書。そして私はそこまで持っていない人が公教に関係することをやっている人は、『大正新修大藏経』などまで。今はかなりデジタル化が進んでいますから、若い研究者はそんなもの本形で持つ必要はありません。私たちの時代は、そういう本を買うところから始めて、買うお金も大変なのですが、狭い日本の家では置く場所も大変なんですよ（笑）。

今西 はい。だから、アメリカで本を持っていない研究者がどういう形の研究をしているか知りませんが、例えば夜になって何か調べたいと思っても、図書館が開くのが翌日の朝だとしたら、一晩中もどかしい思いをしますね。しかも、必要だと思った文献でも、実際に見て役に立つのはそれほど無いものです。十にひとつもあればいい方でしょう。なので、この本は役に立たないということを一瞬も早く知るために、なるべく多くの本は手元に置いてきたい。翌朝、図書館が開く前に仕事は前進します。

横田 そうですね（笑）。それも図書館が電子書籍を購読して研究者に提供すれば検証の速さが違い、研究者個人の研究コストも低くなりますね。実際に欧米、中国、韓国資料はそうなっています。

今西 あとひとつ、欧米と日本の図書館の違いを挙げると、レファレンスではないでしょうか。私はほとんど図書館を利用しないので、これまで窓口でレファレンスをしたことはありませんが、アメリカの大学図書館の司書からは、大学院生や若手研究者からこれこれのことを尋ねられ、これこれの本（論文）を紹介したら喜ばれた、といった話を聞きます。レファレンスに

ついで、日本の司書と話されたことはありますか？

横田 同志社大学の井上真琴さん。「図書館に訊け」という本を書いた方なんですけど、あの方と話したときにオンラインに頼らない、ちゃんとダブルチェックをする、紙の資料で確認するとおっしゃって、「プロフェッショナルの流儀」だと感心しました。

古典研究の危機

横田 古典研究の国際会議を東京で国文研が開催されている。研究の中心は日本。素晴らしいです。

今西 それは「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」という大型プロジェクトの事業の一環です。プロジェクトの拠点になっている大学の研究者に参加してもらって、研究発表やシンポジウムをしています。

横田 ブランダイス大学の先生が、大学院生のときに早稲田の古典籍データベースを見て非常に刺激を受けて、独学でくずし字を学んで読めるようになった。今ではアメリカの大学院生はくずし字を学ぶようになった。古典籍がオンラインで公開されるようになったので、海外での古典籍研究がアップグレードされたのです。私も興味をもって直接話を聞いたら、昨年ハ-

ードでも古典籍オンラインの資料を使い授業をしたそうです。

今西 なるほど。そういうのはすばらしいケースだと思いますが、大きな流れとしては、欧米での日本古典を専攻する学生は、減少傾向にあるのではないのでしょうか、古典以外の日本研究はともかく。

横田 そういうふう感じられますか。

今西 欧米の現役の研究者には大家から若手まで錚々たる顔ぶれが並んでいますが、ヨーロッパでは日本古典を専攻する大学院生の数はあまり多いようには見えません。研究者を多く育ててもポストはかぎられているので、少数精鋭で対処しているのかもしれないのが。

日本研究の国際的地位

横田 先生からご覧になって、国際的な観点から比較して、日本研究はどういう立ち位置にあるのでしょうか。

今西 私が減少傾向を感じているのは、古典研究であって、マンガやアニメといったサブカルチャーなどは結構人気があるようですし、政治・経済などの社会科学分野もそれなりに盛んなのではないのでしょうか。日本文学全体も、漱石や村上春樹など近代・現代を含めればそれなりにいるはずですが、問題は

古典研究です。

横田 私は司書になって大学院生と付き合い始めたのが、一九九九年からなので、昔からの流れというのはあまりわかりませんが、アメリカでは各大学にコンスタントに二〜三人はいるという感じはしているんですが。

今西 日本古典ですか？

横田 古典、あるいは中世史など。

今西 いや、歴史はいると思います。

横田 近世文学も多いようです。

今西 それは心強いことです。アメリカは勢いがあるのででしょうか。最近、ハーバード大学で近世文学でPhDを取った若い研究者が、ケンブリッジの司書になりましたね。

横田 近世文学・近代史・民俗学・社会学・図書館情報学・仏教学を専攻してPhDを取った人が日本研究司書になっています。

今西 それは図書館にとってはすばらしいことです。さきほど触れたアメリカの司書のキャリアの高さに大学院教育が寄与しているわけですね。しかし、研究者ではなく司書になるというのは、教員ポストが足りないからなのではないか。ところで、日本文学研究が盛んなのは、コロンビア大学だという印象を私は持っていますか。

横田 日本研究、人文学の教授ポスト

は減少していますが、コロンビア、プリンストン出身が多いという印象です。でも最近では、現代中国研究を専攻する学生が増えてきていますね。日本でも一九八〇年代に経済成長が著しかったときには、日本語や日本文学・経済・教育学などいろいろなることを研究する人が増えましたが、いまは中国ですね。

今西 国力とかいうか経済力が增大するとの国を対象とする研究が盛んになるのですね。いま、日本はかつての高成長時代に較べると下り坂だから、それが研究者の減少につながっているのかもしれない。

横田 それと、中国研究では、有料のものもありますが、とにかくオンラインですぐに学術論文が入手でき、研究できるといことが大きな要因だと思います。中国・韓国は政府が学術資料の電子化と世界発信を外交・文化戦略の一貫として支援していて、海外で中国・韓国研究者を増やす努力をしています。ミシガン大学では中国研究資料購入予算の半分はデータベースに費やされており、かたや日本の電子資料購入費は予算の五%にすぎません。予算があっても購入できる電子学術資料がそれ以上ないのです。日本の学術資料は有料購読できる電子資料すら少なく、意欲をそがれ、研究にかかる時間とコ

ストが全然違い、研究がしにくい。ただ、今後、科研費など公的資金による研究成果の公開原則というオープンサイエンス政策に準拠して、学術論文のオープンアクセス化が進んでいくことには大いに期待しています。学術振興のためにも日本も戦略が必要ですね。

今西 これは先ほどの著作権の問題ですね。国文研は、創設以来、『国文学年鑑』を編集して、その年の詳細な論文目録を掲載してきましたが、その後、『年鑑』を廃止して、論文目録データベースに切り替えました。それは、論文タイトルと著者名だけでなく、キーワードからも検索できる優れた目録です。しかし、キーワード検索でぜひ読みたいと思う論文が出てきてもすぐには読めないというもどかしさは、普通の目録検索の場合以上に欲求不満が募るのではないのでしょうか。

横田 はい。
今西 それでも国内なら図書館や研究室で読むことができる。けれども外国の研究者にはそれは容易ではありません。その不満を海外でしばしば耳にします。

横田 何よりも日本の優れた研究が埋もれたままです。世界の知的コミュニケーションのなかで認知され共有されたい。人類にとっても損失です。

今西 「人類にとっても損失」だというお言葉は光栄ですが、世俗的あるいは功利的な面でいうと、もし将来、世界的に人文学にも論文引用数による研究者評価という動きが出てきた場合、今の状況では日本の研究者は圧倒的に不利になります。

横田 まったくその通りですね。CrossRef、JSTORに論文書誌情報が入っているだけで、英語の抄録が付いているだけでも随分違います。海外の研究者は重要と思われる論文は翻訳者を雇っても読みますし、Google翻訳の性能もよくなっています。ですから、書誌データベースに論文を出版を課金制でもリンクされることと、公的資金による研究成果が公開されリンクされると論文が見えやすくなり、日本の人文学研究が「一挙に国際化」はまずです。海外の研究者はCrossRefで論文検索をして引用するだけでなく、共同研究者を探したり、会議の発表者を探したりしています。

国際協力研究の今後 ——語学の重要性

横田 今回の話題の中心は、日本研究における国際協力といったことだと思うんですけど、長年のご活動からのご感想はいかががでしょうか。

今西 私たちの世代では、国文学（今日では「日本文学」という呼び方が一般的ですが）を専攻するということは、大げさないうと、海外への夢を諦めることでした。海外に行きたければ欧米の文学や歴史を専攻するでしょう。だから、私たち国文学研究者の多くは、というよりほとんどは、海外に出て行く準備ができてない、つまり外国語ができないのです。しかし外国語の能力なしに海外と交流するというのは、ちよつと無理なところがある。現在、私たちは多くの海外の研究者と共同研究をしたりシンポジウムを開催したりしていますが、それは日本語が堪能な優秀な外国人研究者のお蔭です。日本の研究者は語学的な負担を免除されている。ちよつと飛躍した譬えですが、それは日米関係における「安部タダ乗り論」に似ていますね。

明治以降、日本人は翻訳で外国文学に親しんできました。英語やフランス語が読めなくても、今日ではその逆もあるのではないかと。日本語は読めないけれども翻訳で日本文学に親しんでいる海外の人々です。私たち日本の研究者はそういう人たちの存在に目をつぶっていないのかという問題です。考えてみれば、日本人作家がノーベル賞をもらう場合、それは日本語でも

らうわけではない、審査はたぶん英訳本で行われているのではないのでしょうか。日本語原典をいくら精密に読んでも、ノーベル賞受賞の理由は必ずしも分からないということにならないでしょうか。そして、日本の研究者も英訳の善し悪しがわかるくらいの能力がないと国際研究の場に参加できないのではないかと。もちろん私自身のことは棚上げて言っているのですが。

今後の日本研究者に 求められる資質

今西 皆が皆というわけではありませんが、要所要所にマネジメント能力を持った人がいてほしい。他の分野はあまり知りませんが、国文学には研究に専念する学究型の人材が豊富です。その成果を有効に活用し発信するシステムを築くことが大切です。私は学究でもなくまたそのようなマネジメントの才もあるとは思いませんが、国文研の後任館長には四月からハーバード大学出身のロバート・キャンベルさんが就任する予定なので、今後は期待できます。

横田 国文学で画期的な人事ですね。
今西 いまや外国人教員は日本の国立大学でも珍しい存在ではありませんが、大学を含め研究機関の長になるのは、

たぶん初めてではないでしょうか。

横田 やはり国際化を図ってらっしゃることがよくわかります。

今西 海外の個々の研究者との国際的な交流にとどまらず、研究における国際交流のシステムを作ること、国際共同研究のネットワーク作りが必要だと思います。館長というのは、権限をもっていろいろな改革ができるというお立場なんですか？

今西 副館長以下の教員、管理部長以下の事務職員との信頼関係があれば、かなりのことができると思います。現在の国文研がそういう状態にあるかどうか、私にはよく分かりませんが。

横田 (笑)。でも、いままでもずいぶん変わりました。私が外から見ている限りでも、とても国際的な事業をされています。

今西 いや、国際交流は最近になって始めたというより、ある時期からの時代の流れですね。ただ、ひとつ問題なのは、国文研という機関は本来、各地に散らばっている国文学の資料を調査してマイクロフィルムで収集し保存するという事業が重要な任務のひとつです。それを館ができてから四十年間続けてきました。そして、これはあくまで国内を対象とした事業でした。しか

し、IT環境の進歩とともに、データ化した『国書総目録』に国文研の調査成果を増補し、同時に所蔵者の許可が得られたものはその画像も併載する「日本古典籍総合目録データベース」を世界に向けて発信するようになりました。

他方、先にお話しした大型プロジェクトの事業としては、国文学資料に限らず、広く全分野の古典籍にデジタル化の対象を広げることになりました。天文学、和算、料理、漢方、医学、薬学……、そういった異分野の書物のデジタル化と。一気に全部はできませんけれど、そういった異分野の書物を利用した共同研究を少しずつ始めています。

横田 面白そうですね。

今西 また、海外に所蔵される膨大な日本古典籍については、ケンブリッジのコーニツキ先生作成の在欧洲日本古典籍の目録を現在、国文研からウェブで公開していますが、その目録と「日本古典籍総合目録データベース」との統合も考える必要があります。そして在外の日本古典籍の画像も、『国書総目録』のデータと連動した形で見ることができるようになれば理想的なのですが。

海外の豊富な日本古典籍や資料の存在が明らかになって、今や国文学や日本史の研究者のほうが欧米文学研究者

より頻繁に海外に出ているのではないのでしょうか。

横田 それこそ、日本の国際化の最先端ですね。

今西 一つの間にか、立場が逆転して(笑)。だからこれから期待される若い人には、下手な論文を量産するより、語学をやりなさいと勧めています(笑)。

横田 先生は、国文学の論文も英語で発表すべきだと思われませんか？ 国文学の研究論文は、日本語でしか表現できないようなニュアンスもあると思います。

今西 その通りです。論文は日本語で、しかし少なくとも、自分で書いた論文のサマリーくらいは英語で書く。そして、自分の論文の要点は英語でプレゼンテーションして、質疑応答もできる、ということくらいはやれたほうがいい。これも自分のことは棚に上げての発言です。

横田 それも賛成ですが、それからアメリカの研究者が、日本文学の研究も英語の論文だけ読み英語で書いているのなら、それは「アメリカにおける日本文学解釈」の研究とも考えられますね。私はむしろ、日本語で論文を書く

ぐらいのレベルになってほしいと思ったりします。また、世界中の研究者が

日本語で研究交流するのも「国際化」だと思います。

今西 賛成です。日本の外国文学研究でも、一流の人は、英語やフランス語で論文を発表していますから。しかし、それは日本文学研究者が日本語以外はできないという現状を正当化するものではありませんね。

横田 とところで、今のデジタル文化の「世界基準」は欧米中心です。しかし、日本の学術文化デジタル発信力を強めることで、世界基準を決める議論の中に日本固有の文字も発想も入れていくことができる。国文研や他のデジタル資料がオープンデータ化によってグローバルに活用が増えています。日本のデジタル人文学者も国際会議や組織に参加して議論されており、欧米中心の基準に多様な言語文化が入り、本当の意味での「世界基準」が創られ始めています。世界発信する国文研は人間文化全体を豊かにし貢献していると思います。今西先生は日本語文化を本格的に国際化され始め、その意義は大きく心から敬服致します。今日は有意義なお話をさせていただきました。本当にありがとうございます。